

やけどの処置について

看護師 岸 ひろみ

沸騰したやかんのお湯をひっくり返したり、熱い味噌汁やカップラーメンをこぼしたり、アイロンに触れたり、日常の生活の中で多い事故がやけどです。やけどは、身体の皮膚などが焼けるわけですから、経験から分かるように、とにかくヒリヒリと痛いものです。

最近「傷の消毒は厳禁」と言われています。やけどの処置も同じで、「乾かさない・消毒をしない・毎日の処置」が治療の原則です。もし、やけどをしてしまったら、すぐに冷やすことです。十分に冷やす応急処置がやけどの跡を残すかどうかのカギを握ります。

■自宅での応急手当

1. 水で冷やします。

*できるだけ早くやけどしたところを、流水やためた水につけて冷やしましょう。水に浸けられない場合は、ぬれたタオルをあてて頻りに交換して冷やしましょう。

*衣服は無理やり脱がない・脱がせないようにしましょう。水疱が破れたり、皮膚がむけてしまう危険があるため、衣服の上から直接冷やして下さい。また、はさみで服を切るのもやめましょう。

2. 十分に冷やしたら、ぬれたタオルを巻いて、すぐに医療機関を受診しましょう。

*少しのやけどだからと、自宅にある熊の油やアロエなどを塗ってしまうと、それを落とすのが大変です。診察を受けるまでは、何も塗らない・水ぶくれもつぶさないようにして受診しましょう。

■湿潤療法（ラップ療法）についてご紹介します

当院ではやけどで来院された患者さんに、ワセリンをぬったラップをあてる治療（ラップ療法）をしています。この治療のいい所は、傷の治りが早いこと、そして痛くないことです。

★家庭にあるラップを使用して、傷口を湿潤状態に保つ治療です。

★ワセリンは、保湿効果があり、傷の乾燥を防ぎます。

1. 傷を水でよく洗います。消毒は行いません。（消毒すると傷を治そうと頑張っている皮膚の細胞まで殺してしまい、傷の治りが遅くなります）
2. 傷口をおおうように、ワセリンをつけたラップをあてていきます。浸出液が出ますので、上からガーゼや包帯などで保護します。（やけどの傷にそのまま塗ると、とても痛いので、ラップに塗ることで痛みがありません。さらに傷口が湿潤状態になるため、痛みがなくなります。）
3. 翌日からは毎日傷を洗い、ラップを交換します。浸出液が多い場合や夏場は回数を増やし交換していきます。（この時もラップなので、簡単に剥がれて、剥がす時の痛みもありません。）
 - やけどの周りが赤くなってきた時、腫れてきた時、痛みが強くなってきた時、水ぶくれが破れた時は医療機関に相談しましょう。
 - 分からないことや心配なことがありましたら、いつでも看護師にご相談下さい。

